

● 小林隆児著

『甘えたくても甘えられない』

母子関係のゆくえ、発達障碍のいま

人は人とのかかわりの中で形作られる。なかでも発達早期における養育者との関係は重要である。これに異論がある人はそういないだろう。

その意味で、この本はごく普通のことが書かれている本である。だが、精神発達一般において広く支持されているはずのこの考えが、こと発達障碍に向けられた途端、「育て方が原因で発達障碍になるとでもいうのか」と批判されかねない昨今である。養育関係と発達障碍という課題に正面から取り組む本書のような発信は、危険も伴っている。眉をひそめられ、異端視されるかもしれない。実際、著者の主張はかつて母原病の再来として激しい非難を浴びたという。母原病？ 著者が述べてい

るのはそんな浅薄で単純な因果論ではない。この本を読むとは、それが分かることだと言つてもよいくらいである。

その著者は、児童精神医学、特に発達障碍の分野において研鑽を積んできた臨床家、研究者、教育家であり、言わずと知れた本誌編集人の一人でもある。その業績は本誌のみならず発表され続けてきたが、ここ数年は特に、毎年著作を世に問い、対談やシンポジウムを企画し、その反響への考察を深め、それをまた著述に反映させる……という旺盛な活動を展開している。その様はまさに「精力的」と言えるもので、「臨床の中で掴んだこの真実を、なんと少しでも伝えなくては」といった急ぐ思

いや使命感すら感じさせる。

著者がそれだけのエネルギーを投入して訴えたいことは何か。帯文にそれが端的に記されている。「子どもだけを見ていても、ほんとうのことは分かりません」——著者がこれまで既存の発達障碍論に対して繰り返して述べてきた批判は、ほとんどこの一文に集約されると言つてよいだろう。現在、発達障碍の原因を脳の機能障碍や特性に求める見方は今や常識となつているかのように見えるが、著者はこのような、発達障碍のありさまを「個」に還元する姿勢に異を唱え続けてきた。養育者と子ども、双方のこのころの動きに注意深く焦点を当ててみたまえ、発達障碍に特徴的な症状とされてきたことがいかに「関係」の中で生じているかがわかるはずだから。大事なものが「関係」を見ることなのだ、と。そして、絶えず揺れ動くその「関係」をとらえる鍵が「甘えのアンビヴァレンス」、すなわち書名として凝縮

されている「甘えたくても甘えられない」というこのころの動きなのだ、と。おもにMIU（母子ユニット）におけるSSP（新奇場面法）での知見を基に、著者はそう主張してきた。

だが、ここまでなら既に発表された著作でも述べられてきたことである。本書がこれまでの論述より進んだ点は、乳幼児期の「甘えたくても甘えられない」このころの動き、およびその関係が補正されないまま年を経たとき、問題はいかなる様態を示し、かつ固定化していくのか、自験例をもつて描いたことにある。学童期から青年期・成人期までの発達段階を追いながら、各段階の心理・社会的な発達課題を絡ませて描出している。それは、「常同反復行動」や



河出書房新社 2015年
1650円（税別）

「多動」、「字義拘泥」といった「症状形成」の問題に留まらない。自己意識や主体性、母子分離や仲間体験、性をめぐる混乱など、広く「人格形成」にまつわる課題をも視野に入れたものとなっている。全体の基底部に、「甘え」の普遍的重要性を説いた土居健郎の仕事へのリスペクトが流れている。

私はこの五、六年、著者の仕事に継続的に触れてきたが、著者のエネルギーは「仮想敵」（既存の発達障碍論）とどう戦うかに注がれているのだと、つい先ごろまで思っていた。だが、本書を含む最近の著作を読むうちに、少し違うような気がしてきた。著者の力点はもう、そんな局地戦には置かれていない。もつと広く、臨床精神医学全体に向けられているのではないか。著者は「子どもと養育者のこころのつながりをいかにすれば取り戻すことができるか、という一念で」本書の筆をすすめたというが、その射程は実は、現在の精神医学そのものをも含んでいると言えるだろう。「個」の「行動」にばかり着目している精神医学に「こころそのもの」を見る姿勢と

技術を取り戻す。著者の近年の精神的な活動は、その思いに突き動かされているのかもしれない。行間から、怒りや嘆きや希望が洩れ交ぜになった、著者の「力動感」に満ちた声が響いてきそうである。こんなことでは精神医学は息を止めてしまうぞ。

本書は著者の仕事が発達障碍という特定領域を超えて、人間の自己

●驚見 聡著

『発達障害の謎を解く』

形成一般の問題、および精神科臨床全体を論じることへと本格的に踏み出したことを告げるものである。本書に続けて刊行された『あまのじやくと精神療法』（弘文堂、二〇一五）が、その歩み具合を確かに示している。

— 内海新祐

（うつみ・しんすけ／川和児童ホーム）

自閉症という独立した精神疾患名が誕生してすでに七〇年あまりが経過した。しかし、自閉症をはじめとする発達障碍の理解についてはいまだに錯綜した事態にある。環境因か器質因かという原因論をめぐる混乱だけではない。診断名とその基準さえ一〇から二〇年毎に変更が加えられ、いまだに定着する兆しがみえない。なぜこれほどまでに時計の振り子のような大きなぶれが生まれるのか。その要因を振り返るなかで、昨

今の研究知見を取り上げながら「発達障害の謎」を懇切丁寧に解き明かそうと試みたのが本書である。

発達障碍に関する議論は、ややもすると「障害か個性か?」「治るか治らないか?」「遺伝か環境か?」「という二者択一的なものになりがちだが、著者は、先天的要因（遺伝要因）か、それとも成育環境（環境要因）か、という従来のどちらか一方に決めつけようとする考え方から脱皮し、双方の要因のダイナミックな

絡み合いの解明こそ、今求められている課題だと説く。その根拠となっているのが、最近の遺伝子研究の成果である「エピジェネティックス」という考え方である。これまで自閉症に限らず多くの疾患の原因を論じる際に「遺伝か環境か」という二者択一の議論が多かった。それを支えていたのが、遺伝要因は変化しないという通念であった。しかし、環境要因が遺伝子に影響を与えて、その働きを変化させるということが最近の遺伝子研究で明らかとなった。それがエピジェネティックスというメカニズムである。

「ある種の遺伝子にはその働きをコントロールするスイッチに相当するものがあり、その切り替えによつて遺伝子の働き具合が変わる。このスイッチの切り替えを行うのは「環境要因」で、遺伝子本体を変化させずに働き具合のみを変える。エピジェネティックスの発見は、遺伝要因と環境要因が合わさつて機能するシステムが存在すること、遺伝子機能が後天的に変わりをすること、初めて証明したのである。」（五三頁）
たとえ病気の関連遺伝子であつて